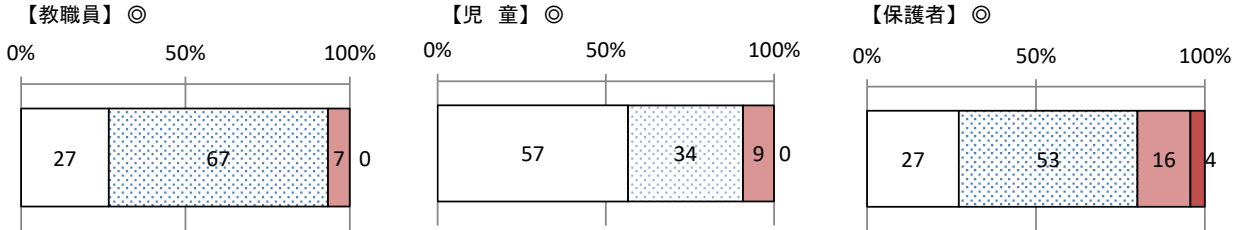


令和4年度学校評価

上島町立弓削小学校

<input type="checkbox"/>	できている	<input type="checkbox"/>	どちらかといえばできている	<input type="checkbox"/>	どちらかといえばできていない	<input type="checkbox"/>	できていない
A/◎	目標を達成(8割以上が肯定)		B/O	おおむね達成(6割以上が肯定)		C/△	あまり達成できていない(肯定が6割未満)
▲	:前年度より◎○△の評定が上がっている			▼ :前年度より◎○△の評定が下がっている			

【A】指標1 基礎的・基本的な知識・技能が身に付いている。



【分析】

児童の結果は昨年度と同程度であるが、教師と保護者の否定的意見(「どちらかといえばできていない」と「できていない」を合わせたもの)は、やや増えている。一定数の児童と保護者が基礎的・基本的な知識・技能の定着に不安を感じている。一部の教職員も基礎的・基本的な知識・技能の定着に自信が持てていない。他の小学校との比較ができる学力テスト(愛媛県学力診断調査・県10分間テスト等)の結果を見ても、本校の平均点は全国平均・県平均より全体的に低い傾向が続いている。

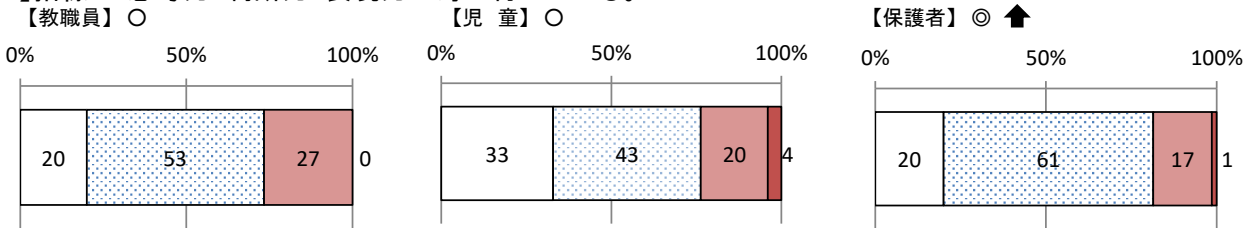
【改善方策】

基礎的・基本的な知識・技能の定着に向けて、一人一人の苦手なところや身に付いていないところを確実に見取り、個に応じた指導を充実させる。また「むげんタイム」や「夢現塾」の内容や実施方法を見直す。

「一斉テスト」では、約9割の児童が80%以上の合格点に達しているものの、正答率が50%以下の児童もいる。合格点に満たない児童に対しては、個別の指導を継続していくとともに、結果だけではなく、個に応じた努力を認め、学習意欲が高まるように励ましていく。

教職員の研修の機会を増やし、基礎的・基本的な知識・技能の定着に向けて、学習教材の工夫や授業改善に努めていきたい。

【B】指標2 思考力・判断力・表現力が身に付いている。



【分析】

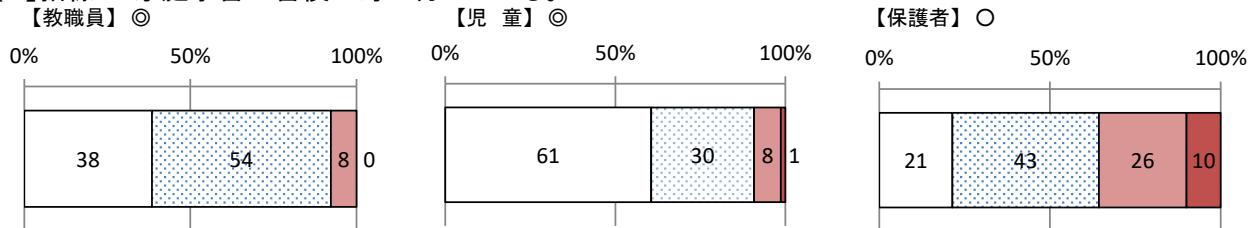
保護者の肯定的意見(「できている」と「どちらかといえばできている」を合わせたもの)は昨年度と比べてやや増加している。しかし全体としては否定的意見が2割～3割程度を占めている。思考・判断・表現といった活動は基礎的・基本的な知識・技能を活用して行われるため、基本的な知識・技能の定着が不十分であると、思考・判断・表現の活動を充実させることは難しい。また現在も新型コロナウイルス感染症対策に配慮しながら教育活動が行われており、それも原因の一つであると思われる。

【改善方策】

表現力の育成については、今後も新型コロナウイルス感染症対策に配慮しながら、ペアや小グループでの学習を充実させ、児童が話したくなるような学習を展開していく。また、教科だけでなく、特別活動を始めたとした日常的な場で「話す・聞く」活動を意図的に増やし、話し手や聞き手を意識しながら話したり聞いたりできるようにする。

基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させることに重点を置きつつ、身に付けた知識や技能を活用した学習も積極的に進めていく。さらに、タブレットや本年度導入された電子黒板等のICT機器を効果的に活用し、思考力・判断力・表現力を引き出していく授業改善を行っていく。

【A】指標3 家庭学習の習慣が身に付いている。



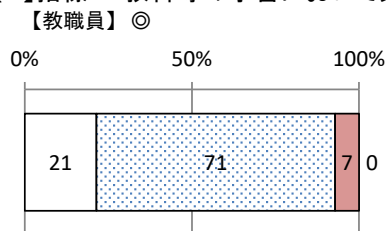
【分析】

昨年度と比べて教職員の否定的意見が10ポイント減り、児童と同程度の割合になったが、保護者の否定的意見には変わりがなかった。およそ3人に1人の保護者が家庭学習に対して十分だとは思っていない。この結果から、宿題や自主学習などの提出はできているが、児童が進んで勉強しているわけではなく、保護者に促されて(やらされて)取り組んでいる状態ではないかと思われる。

【改善方策】

年度初めの学級PTAで「学習強調週間」や家庭学習の在り方等について話し合う必要がある。保護者の意見を取り入れながら共通理解を図っていくことで、学校と家庭とが協力しながら家庭での学習習慣づくりを目指していきたい。学校は、保護者任せにしないように、時間の使い方や家庭学習の大切さを児童に理解させ、日々の授業を通して、自分ら進んで学習に取り組む態度を育てていく。

【A】指標4 教科等の学習において文章にまとめる、全体で発表するといった言語活動を積極的に取り入れている。



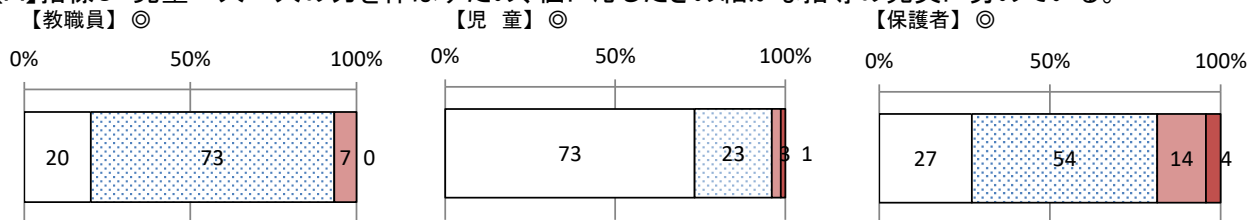
【分析】

昨年度と比べて肯定的意見が10ポイント増えている。新型コロナウイルス感染症に配慮しながらではあるが、ペアやグループ、全体での話し合いや伝え合いといった言語活動を授業の中に積極的に取り入れることができ始めている。また、タブレット等のICT機器を使った意見交換やプレゼンテーションで発表する等の機会を増やしていることも一因と考えられる。

【改善方策】

今後も、ペアやグループ、全体での話し合いや伝え合い等の言語活動を学習の中に積極的に取り入れていく。また、ICT機器を活用することで、書くことや話すことに対する苦手意識を軽減することが可能である。こうした機能を最大限生かし、ICT機器を使って自分の考えをまとめたり意見を交換・発表したりする機会を増やしていきたい。

【A】指標5 児童一人一人の力を伸ばすため、個に応じたきめ細かな指導の充実に努めている。



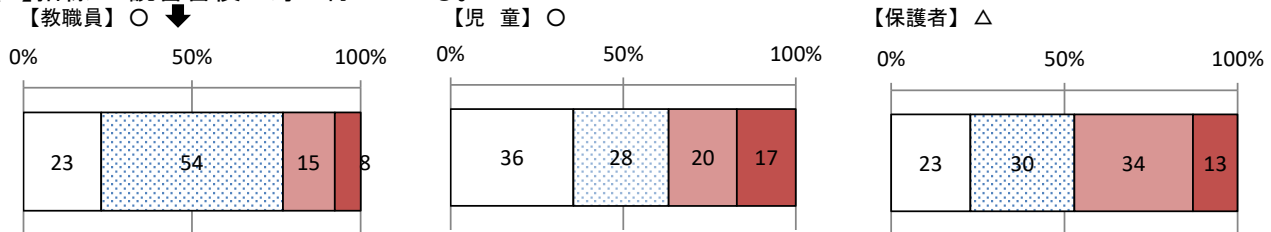
【分析】

昨年度と比較すると、教職員・児童、保護者の三者とも積極的肯定的意見が減り、児童と保護者は否定的意見も増えている。昨年度は新型コロナウイルス感染症対策が強化された年であり、多くの行事や活動が中止や延期に追い込まれた。しかし、その分、教職員にとっては一人一人の子どもと向き合う時間や心の余裕が例年より多く確保できていたように感じる。教職員の多忙感を解消しつつ、一人一人の特性に応じた指導に掛ける時間をどう確保していくかが問われているようにも思える。

【改善方策】

今後も個に応じた適切な指導の充実を図るために、特別支援教育の視点を生かした指導やICT機器の効果的な活用方法などの研究を進めていく。各教科の学習では、一斉指導だけでなく、個別指導の時間も確保していく。また、児童についての情報を学校と家庭が積極的に交換することで、個の学習のつまづきや特性、学習進度、学習到達度等を把握することができる。そして、一人一人に応じた指導方法を工夫したり、学習課題を提供したりすることにつながっていく。

【B】指標6 読書習慣が身に付いている。



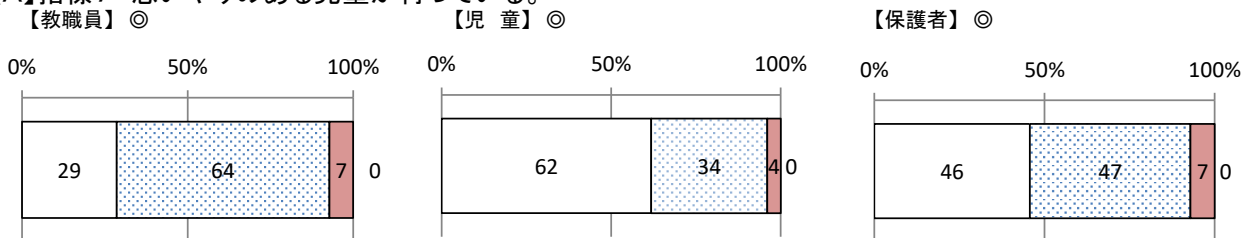
【分析】

年々、数値が悪化してきている項目である。学校司書や図書サポーターの活動もあり、朝読書や自習の時間、図書室利用の時間等ではよく本を読んでいるが、家庭での積極的・習慣的な読書にはつながっていない。ただ、読書量の減少は子どもだけの問題ではない。親世代も本から遠ざかっていると思われる。タブレットやスマホの普及により、SNSや動画視聴といった情報入手コンテンツの多様化が遠因にあるのではないだろうか。

【改善方策】

学校・家庭共に多忙を極める中で本を読むようにするには、自分から進んで読みたいと思える本に出会わせることが必要だと考える。子どもが図書に触れる機会を増やすことで、自発的に読書する意欲を高めていきたい。現在学校では、学校司書による読み聞かせ、図書サポーターによるイベントなど、図書や図書室を身近に感じさせるための活動を積極的に行っている。学級文庫も月に1回入れ替え、いろいろなジャンルの本と出会える機会を設けている。こうした取組を今後も継続して行っていく。また、親子で読書に親しむ時間を設けていただくなど、家庭への啓発活動にも力を入れていきたい。

【A】指標7 思いやりのある児童が育っている。



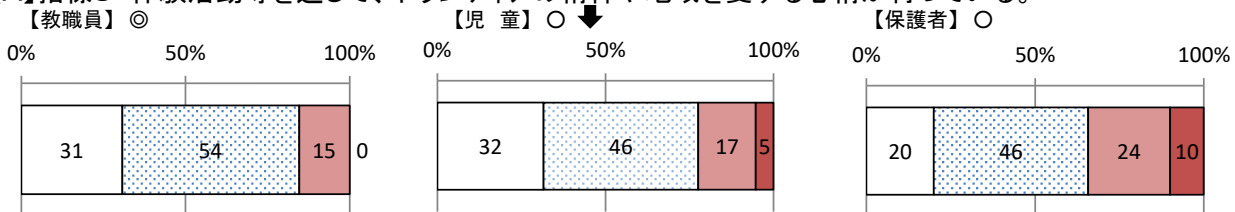
【分析】

昨年度と比べて大きな変化はなく、三者の数値に大きなずれも見られない。児童が「思いやり」を9割以上が感じている一方で、思いやりのない言動が気になっている教職員や、友達の言動で辛い思いをしている児童・保護者も存在している。ただ、コミュニケーション能力に課題がある児童を「思いやりのない児童」と捉えるのは大きな間違いである。一人一人の特性を教職員・児童・保護者が正しく理解した上で指導や支援を行っていかなければならないと考える。

【改善方策】

思いやりのある児童を育成するためには、他者との関わりが大切であり、学校では、友達を中心とした様々な人との関わりの中で思いやりの心が育っていくと考えている。中でも縦割り班活動は、異学年との交流を基盤とし、掃除や遊び、集会など、様々な活動が展開されている。しかし、新型コロナウイルス感染拡大前に比べて、その活動が縮小傾向にあることは間違いない。今年度は、縦割り班での遊びを再開させることができた。今後、更にその回数を増やすなどして、縦割り班での活動の充実を図りたい。また、次年度は人権集会が行われる年であり、集会の計画や実施を通して一人一人の人権についてじっくりと考える契機としたい。

【A】指標8 体験活動等を通じて、ボランティアの精神や地域を愛する心情が育っている。



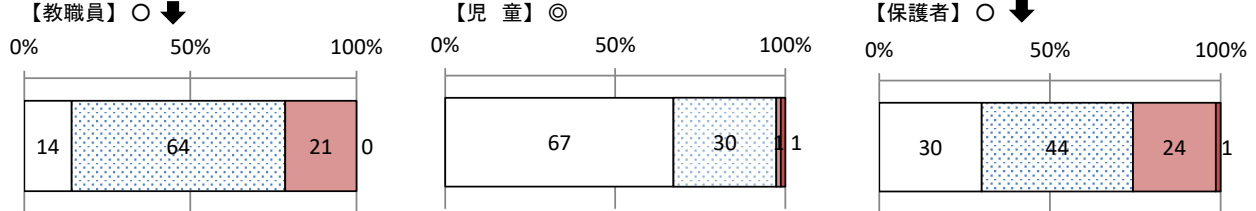
【分析】

全体的に昨年度より数値を下げている。昨年度は県のへき地・地域教育研究指定校として研究大会を行うなど、地域学習・体験学習を積極的に進めていた。本年度は研究指定が解除されたことや、新型コロナウイルス感染症対策等により、体験活動を十分行うことができていないこと等が数値の低下に影響を与えているのではないだろうか。

【改善方策】

新型コロナウイルス感染症対策をしっかりと講じた上で、これまで同様に、地域の自然・人・文化等と触れ合ったり関わったりする地域学習・体験学習を積極的に進めていく。その際、地域から学ぶことにとどまらず、地域に発信したり貢献したりする活動を重視し、児童自らが地域学習・体験学習に有用感や効力感を感じられるようにしていく。

【A】指標9 気持ちのよい挨拶ができる児童が育っている。



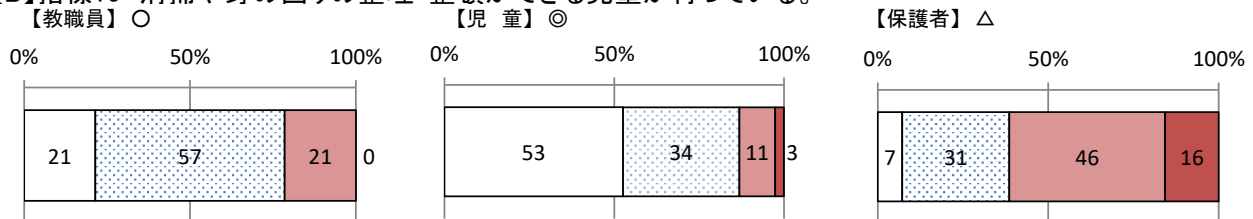
【分析】

教職員と保護者の否定的数値がやや上昇した。児童の数値に大きな変化はない。児童は挨拶がよくできていると感じているが、教職員と保護者はそれほどできているとは受け止めていない。児童と大人との間で「気持ちのよい挨拶」の捉え方にずれがあると思われる。

【改善方策】

今年度「あ・じ・み」の「あ」を合言葉に挨拶の指導を行ってきた。児童の中で挨拶に対する意識は高まったと思うが、受け手に「できていない」と思われているということは不十分と言わざるを得ない。今後は、相手意識を持たせることに重点を置き、取り組んでいく。委員会や学級、学校全体の具体的な取組を通して、受け手が「気持ちが良い」と感じるような挨拶を目指していきたい。

【B】指標10 清掃や身の回りの整理・整頓ができる児童が育っている。



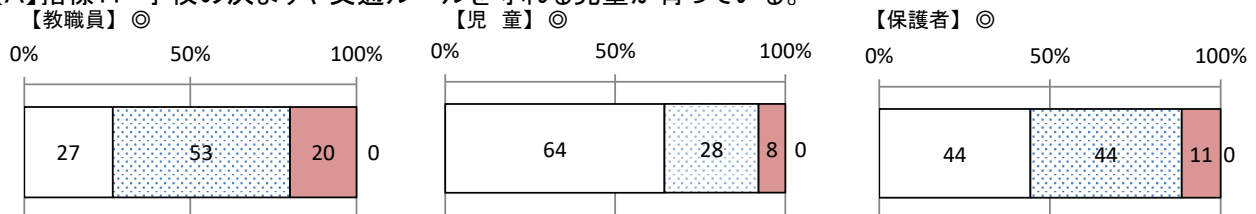
【分析】

全体的には昨年度と大きな変化はない。保護者が肯定的に捉えた割合は38%しかなく、アンケートの中で最も低い評価となった。一方、児童の肯定的に捉えた意見は86%と高く、保護者と児童の捉え方に大きな差が見られる。教職員の評価が児童の評価に近いことから、学校における指導の下では清掃や整理・整頓がある程度できているが、家庭ではあまりできておらず、整理・整頓の習慣化が図られていないことがうかがえる。

【改善方策】

「学校ではできるが、家ではできない」ということが結果に表れている。しかし実際は、学校でも家と同様に「教師に言われたからやる」という状態の児童が多い。片付けの習慣が身に付くように継続的な指導を心掛けることや、身の回りの汚れや乱れに気付かせるような言葉掛けを増やしていくことで対応したい。

【A】指標11 学校の決まりや交通ルールを守る児童が育っている。



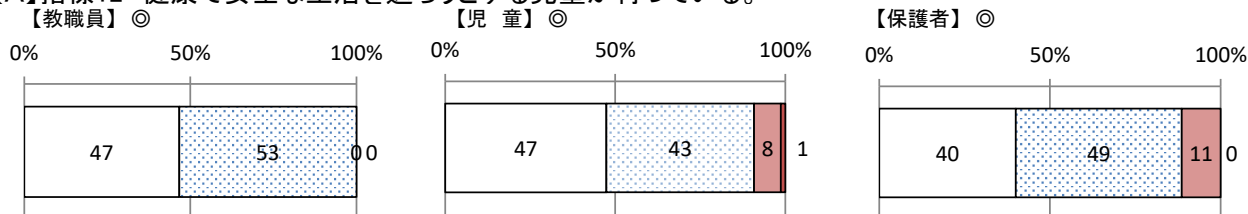
【分析】

昨年度は、教職員と児童のほぼ100%が肯定的に捉えていたが、今年度は否定的意見が増えている。保護者の数値に変化はない。しかし、積極的肯定意見だけを見ると、児童と教職員の割合には大きな違いが見られる。児童は決まりやルールをしっかり守っていると思っているが、教職員や保護者は十分ではないと感じている。

【改善方策】

価値観や生活様式等の多様化によって、何でも一律に指導することが難しい時代になってきている。どのような場合でも一方的に決めつけず、時間を掛けて話し合うことで、解決への道は見えてくると信じている。これまで、その都度、学校の決まりやルールの部分的な見直しを行ってきたが、再度、徹底しなければならないことは何かということを経験者・児童・保護者で確認する機会を持ちたいと思う。

【A】指標12 健康で安全な生活を送ろうとする児童が育っている。



【分析】

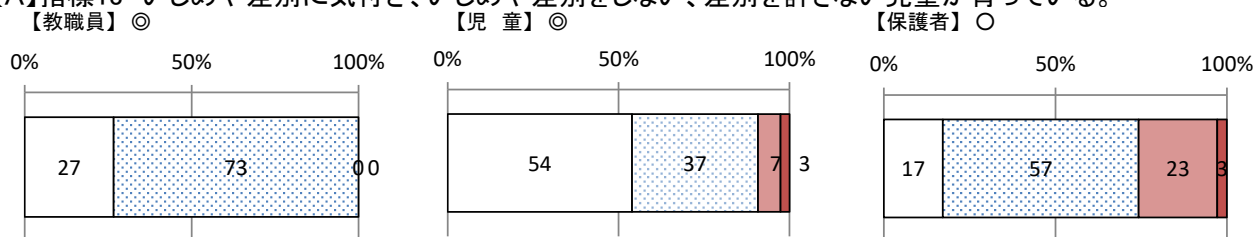
教職員の否定的意見は0%だが、児童と保護者の1割は否定的に捉えている。ほとんどの児童が健康で安全な生活を送ることができていると感じている一方で、健康面や安全面で不安や心配を抱えている児童・保護者がおり、丁寧なサポートが求められる。

【改善方策】

身体計測や健康診断では、児童が自身の健康に関心を持てるよう、事前・事後の情報発信や円滑な実施に、一層努めていきたい。また「保健だより」や保健関係行事を通して、健康な生活を送るための方法を積極的に提供し、児童の意識を高めていきたい。

安全な生活については、教師からの一方通行的な指導だけではなく、児童が自分事として自らの生活の仕方を振り返ることができるような取組を、委員会活動を中心にして行っていく。

【A】指標13 いじめや差別に気付き、いじめや差別をしない、差別を許さない児童が育っている。



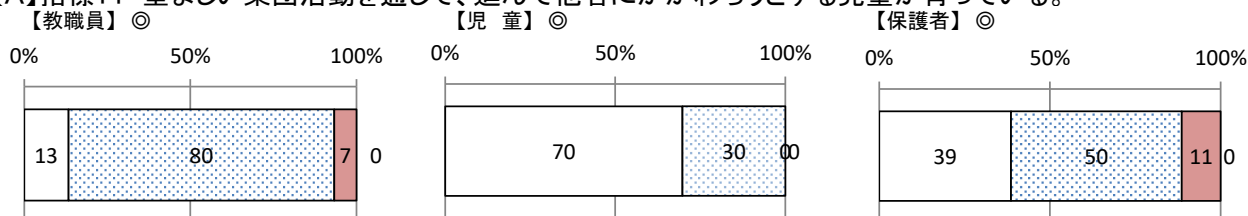
【分析】

いじめや差別に対する教職員の意識は高く、いじめや差別を許さない指導に努めていることがうかがえる。しかし、10%の児童、26%の保護者が否定的に捉えており、学校の対応や現状に満足できていない。ただ、いじめや差別は年々複雑化してきており、以前は主流であった厳しい指導が、逆に事態の悪化を招いてしまうこともある。固定化された人間関係の下、どのように子ども同士の(保護者同士も)よりよい関係を築いていくかが課題であろう。

【改善方策】

いじめや差別については、道徳科の授業を中心に、今後も粘り強く指導を行っていく。また、いじめや差別等につながると考えられる言動や行動を目にした際には、迅速な対応と双方の立場に立った丁寧な指導を心掛けたい。ただ、現在のいじめや差別の問題は複雑化してきており、目に見えるものだけが全てではない。SNSやオンラインゲーム、タブレット等が児童にとって身近なものになってきている。インターネット上のトラブルに対しても、児童への指導と保護者への啓発を怠らないようにしたい。

【A】指標14 望ましい集団活動を通して、進んで他者にかかわろうとする児童が育っている。



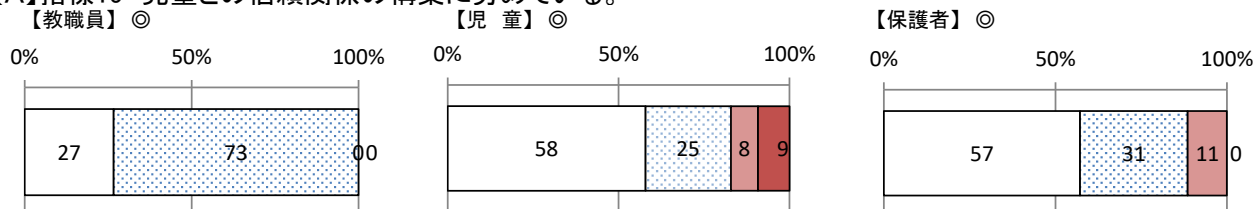
【分析】

全体的な数値は昨年度と大きな変化はない。全員の児童が肯定的に捉えており、学校の様々な教育活動で他者との関わりに充実感を感じていると思われる。新型コロナウイルス感染症への不安がなくなったわけではないが、学校行事や集団活動、ペアやグループでの学習が以前のように再開されたことも要因の一つであろう。しかし、一部の児童はコミュニケーションに課題があり、他者とうまく関わりが持てないことに困り感を感じている様子もうかがえる。

【改善方策】

児童を見ていると、縦割り班活動での活動(遠足や清掃、遊び等)に充実感を感じている様子がうかがえる。次年度は、縦割り班活動を充実させ、他者と関わることの楽しさを感じさせたり、他者と関わることの意味や価値に気付かせたりしていく指導を目指したい。

【A】指標15 児童との信頼関係の構築に努めている。



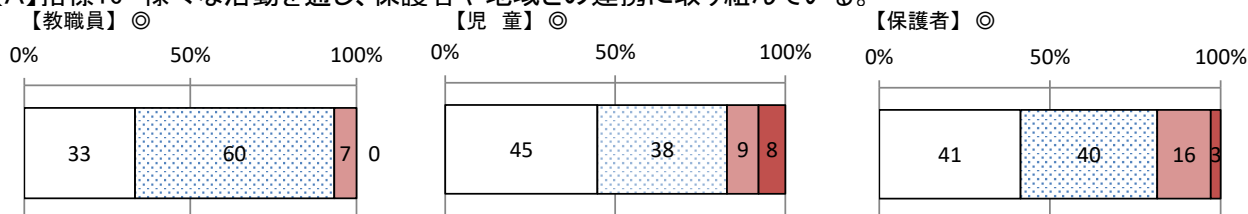
【分析】

教職員が児童との信頼関係の構築に努めることは当然である。しかし、本年度は、児童の否定的意見が12ポイント増加し、否定的に捉えている児童が約2割に増えた。児童用アンケートでは「学校に行くのは楽しいですか」という文面がこの指標における評価の根拠になっている。しかし、学校が楽しくない原因には、教師との信頼関係がうまくいっていないこともあるだろうが、学習面や児童同士の人間関係、発達への不安、家庭内の様々な事情など、複合的な理由があるものとも考えられる。

【改善方策】

全員に「学校が楽しい」と感じてもらいたいというのは教職員・保護者の変わらぬ願いである。同時に、人生にはうまくいかないことや思い通りにならないことがあり、困難を自分で乗り越えていく力も身に付けてほしいという願いも持っている。児童一人一人が何に困っているのかを理解し、助けた方がいいのか見守った方がいいのかを適切に判断し、教職員と保護者が協力して児童に関わっていく姿勢をこれからも大切にしたい。また、従来の指導方法に固執せず、「令和の日本型教育」に沿った多様な指導を展開していく必要も感じる。

【A】指標16 様々な活動を通し、保護者や地域との連携に取り組んでいる。



【分析】

保護者の否定的意見が15ポイント上昇している。新型コロナウイルス感染症対策が緩和され、保護者や地域と連携した活動が再開されてきてはいるが、以前ほどの規模では行われなくなり、連携の充実感を得られにくくなっているのではないだろうか。時代とともに行事や活動も変容していく中で、どのように保護者や地域と連携し、これからの学校をつくっていくかが課題である。

【改善方策】

今後も地域に根差した特色ある教育を推進していくため地域学習の充実を図るとともに、様々な活動において保護者と協力し、保護者の力を教育活動に最大限生かしていく学校づくりを推進する。そして、学校運営協議会とともに、学校・家庭・地域が一体となった「開かれた信頼される学校づくり」に一層努めていく。

【A】指標17 地域の人や来校者に温かく接したり、声を掛けたりして、学校に立ち寄りやすい雰囲気をつくっている。



【分析】

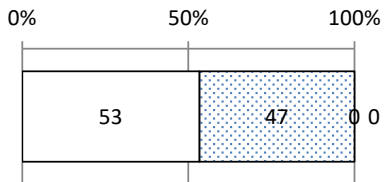
ほとんどの保護者は肯定的に捉えていることから、多くの保護者にとって学校は立ち寄りやすい雰囲気をつくっていると考えられる。しかし、全員の保護者にとって立ち寄りやすい雰囲気があるとは言えないこともうかがえる。

【改善方策】

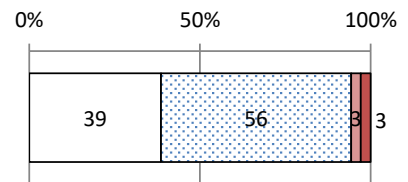
来校時の応対について保護者から一定の評価が得られていると考えられる。今後も、保護者を含め来校者に接するときには対応している自分自身が学校の「顔」であることを意識し、表情や言葉遣いに細心の注意を払うように努めていく。

【A】指標18 学年通信やホームページ等で、学校の取組や様子を伝えることができる。

【教職員】◎



【保護者】◎



【分析】

94%の保護者が、学校は学年通信やホームページ等で学校の取組や様子を伝えることができていると考えており、一定の評価が得られていることが分かる。

【改善方策】

学校ホームページを通しての情報発信や、マチコミメールのタイムライン機能を活用した修学旅行や自然の家の様子報告等、多くの保護者や教育関係者の方から好評価をいただいております、無理のない範囲で今後も継続していく。一方、学校便りや学級便りについては、まだまだ工夫の余地が残されているように感じる。学校から一方通行の情報提供ではなく、学校と保護者が双方向にやりとりできるような情報共有の方法を模索していきたい。